

涙・涙の慰霊巡拝…父の眠るフィリピンへ

御殿場市遺族会 小宮山弘子

静岡県遺族会海外戦跡地慰霊巡拝に初めて参加。静岡県内の戦没関係者の中で、ルソン島リザール州タバコ地区へ、この地で父を亡くしたのは私一人でした。

慰霊祭は、ホテルからバスで2時間位の山奥の小さな村で実施されました。

「弘子は大きくなった事でせう。」昭和19年8月15日、3度目の出征をした父からの手紙には、必ずこの一言がつづられています。

古希を迎える私をずーと見守ってくれたことへの感謝と今の幸せを報告し、2年前に父の元へ旅立った母と今度こそ幸せにと祈りつつその場を後にし、その後いたる所で慰霊祭が行われました。

昭和19年10月31日の父からの手紙は台湾の高雄市、その後の手紙は比島とあり、この頃の戦いを想像しただけでも胸が熱くなる思いですが、現地ガイドのヒデ子さんの詳しい説明も加わって、その悲惨な状況が鮮明になり涙、涙の慰霊の旅でした。

20年前、母が3度目の慰霊巡拝を「他の国にしたら」といった私に「フィリピンが一番いいんだよ」と、この地に立って、この言葉の意味が、心からわかったような気がします。 (会報ごてんば2014年1月号より)

父の眠る小笠原の海へ…静岡県遺族会慰霊巡拝に参加

御殿場市遺族会 芹澤哲之

午前10時東京竹芝桟橋を出港、25時間30分の船旅でした。

おがさわら丸は6,700トンでしたが、外洋に出て時化てきたら寝ているマットごと横壁に寄せられることもあり、親父達が乗っていた103号輸送艦は890トン、そんな小さい船ではどんなに揺れたらろうか…。

父島、母島の戦跡は、保存状態が思っていたより良く、ジャングルの中に高射砲陣地跡（大砲が錆びて残っている）、海運通信隊本部壕（岩山を手掘りで車の通れる大きさにしてあり）、沈船、墜落機、トーチカ、一人がやっと入れるタコツボ、各隊間連絡通路、塹壕等々多く見られました。現在の若者達（10代～30代）に見せてあげ、戦争の悲惨さ、虚しさを知って欲しいと感じました。

父島での慰霊祭は、海上自衛隊基地内にある海軍基地跡で、母島は翌日海軍司令部施設跡で行われ、散華された方々を偲びました。

小笠原諸島での戦いはなかった様ですが、諸島周辺海域から硫黄島にかけて

の海域では数多くの艦が、飛行機または潜水艦の攻撃を受け没しています。

私の戦跡慰霊参加は（硫黄島）（戦没者遺児による慰霊友好事業 20 周年記念 洋上慰霊 12 日間）、そして、今回の（静岡県遺族会小笠原諸島慰霊巡拝）と 3 度参加させていただきましたが、毎回自分自身に「戦争遺児をつくっても、つくらせてもいけない」と念じますが、昨今世界各地で戦いが起こっている事が残念でなりません。親父達が熱い思いを抱いて戦い、散華された事を決して無駄にしない様、日々を過ごしたいと心掛けていますが、思うようにいきません。反省合掌。
（会報ごてんば 2014 年 8 月号より）

母の戦争のはじまり 早く楽させたいとの一念

御殿場市遺族会 勝又正敏

私は昭和 18 年 2 月、静岡市紺屋町で生まれた。父は営外居住を許され、連隊に通っていた。

昭和 19 年 5 月父がサイパンへ出征し、母は私を負ぶって御殿場市中畑へ。そして母の戦争が始まった。

敵陣へ切り込んで戦死した父が、静岡護國神社へ合祀される時、母に連れられ参列。「父ちゃんが神さんになってあの上に乗っているよ」と、母は教えてくれた。それは神職さん達に担がれていた。父ちゃんが見えるかと必死に背伸びをしたことを覚えている。母と二人の生活『早く大人になって、母に楽をさせてやりたい』との一念だけだった。

父と別れ 73 年。数えきれない多くの皆さんに支えられ、歳を重ねて今日まで来ました。慰霊巡拝や遺骨収集で、『兵隊さん達の思いや無念さ』を感じてきました。浅学菲才の身ながら、『お世話になった恩返し』と遺族会役員を引き受けました。

戦争が、愚かでむごい、惨めなことを、そして、平和のありがたさや尊さを、さらに、英霊に感謝し、お祀りすることは、『永遠の責務』と、子々孫々に伝えなくてはと思っています。
（会報ごてんば 2017 年 6 月号より）

70 周年記念事業の成果に大きな感動を覚える

御殿場市遺族会 高村政幸

私の誕生日は昭和 17 年 5 月です。父親は私の 1 歳の写真を胸に戦地に立ちました。

物心ついた頃でも父親の存在すら考える事もなく、幼少期を過ごし、小学校

入学、中学、高校を無理なく通わせていただき、就職して間もなく結婚いたしました。私の人生で初めて女房の父親（親爺）を「お父さん」と呼ぶ人ができました。

親爺の顔も知らない自分は、戦争遺児である事を頭の中で、心の中で実感いたしました。自分が今ここに居るのも、親爺が残してくれた一粒種であると同時に、生活と成長ができたのは、母親の一生懸命の努力と親族と親戚の皆様のお陰だと思っています。

現在の遺族会の状況は、会員の高齢化が進み、戦争経験のない人達が多くなり、英霊への敬愛思想が薄れ、忘れがちの世代に進んでいます。

この度「新つつじ会館の建設の奉賛金募集」に係わる機会を得て、大きな感動を覚えました。募集の結果は予想をはるかに超えた結果に、心から関係者の皆様に感謝、私達は今後も戦争の悲惨さを、後世まで訴え続ける事が使命だと思います。英霊諸侯は望郷に思いを馳せ、愛しい家族との再会もかなわず、国の犠牲となりました。この無念さはいかばかりかと、会員皆様の無念さも同じである事を深く感じ得ました。（会報ごてんば 2017 年 6 月号より）

2 カ月で二人の子供が戦死 祖父母の気持ちとなると辛い

御殿場市遺族会 勝間田敏博

私の家での戦没者は二柱で、私の父の兄弟で叔父にあたります。上の兄は中華民国山西省大谷で、昭和 19 年 9 月 20 歳で戦死でした。

今回は、下の弟を取り上げたいと思っています。弟は海軍で空母（信濃）72,000 トンの乗務員でした。横須賀から処女航海で護衛駆逐艦（雪国、浜国、瀬国）に守られながら、呉軍港に向かって航行中、敵の放った魚雷 4 発が命中、艦上には（将兵、工員、軍属）約 2,516 名が乗船されていたとされ、約 1,080 名は救助されたが、残り約 1,435 名は、船と共に海底 4,000m に沈んだ。世界最大の航空母艦「信濃」は 1944 年 11 月 29 日（水）処女航海において 17 時間で沈んだ。弟は 23 歳で兄と共に嫁もとらず、子孫も残さず、お国の為海に散った。

2 カ月の間に二人の子供を亡くした祖父母の気持ちを考えると辛い。戦後 72 年が経過し、戦争の体験、悲惨な過去が風化しつつある時、次の世代に語り継ぐ責任があります。その為の活動を微力ではありますが、皆様と心合わせ、力合わせの努力をしていきたいと思っています。

（会報ごてんば 2018 年 6 月号より）

父の慰霊祭モンゴルで 私の人生に一区切り

御殿場市遺族会 湯山豊彦

私は昭和20年9月21日の戦後生まれですが遺児です。私達家族は、父の仕事の関係で昭和18年から満州（現在の中国東北地区）で暮らしていました。

父は終戦間近の昭和20年5月に身重の母と姉を残して現地召集され、そのまま帰らぬ人になってしまったからです。昭和20年8月11日に中国モンゴル自治区で戦死したことになっていますが、実際は行方不明で部隊全滅の日を戦死日として、葬儀は昭和33年7月に行いました。

残された母は、昭和21年7月に、1歳8カ月の姉を歩かせ、私を前に抱っこし、背中には重いリュックサックを背負って日本に引き揚げて来ました。母はどんなに大変であったか想像に絶するものであります。

その後、私達は母の故郷である御殿場で生活していました。女手だけで苦勞して2人の子供を育ててくれた母は、若い時の無理がたたったためか、昭和52年に59歳の若さで亡くなりました。

私は、63歳まで会社に勤め、退職した翌々年の平成22年8月に、日本遺族会の行事である日中友好訪問団（旧満州地区）に参加しました。遺児21名のそれぞれの親の戦死地を訪問する9日間の旅でした。父が戦死したとされる中国モンゴル自治区で慰霊祭を行なっていただき、私の人生に一区切りがつかしました。

今後の遺族会はますます高齢化が進み、会員の多くは戦没者の甥・姪で次の世代になったらどうなってしまうのか心配が尽きません。将来の心配どころか現在でも仕方なく参加している人もいます。

遺族会の活動もいろいろありますが、英霊顕彰に異を唱える会員はいないと思いますので、活動の主体を英霊顕彰に絞っていったら良いと思っています。同時に、戦死者の身内として縁があって集まっている訳ですので、会員の親睦と融和をより深める活動を願っています。

また、会員の一体化をはかるため「戦没者の遺族に対する特別弔慰金」支給対象者の見直しを期待しています。（会報ごてんば2018年6月号より）

私の戦争体験記 シベリア捕虜生活

御殿場市遺族会 岩瀬春雄

戦後73年の月日は流れ、戦争を知らない世代が増えている中、世界から注目されるほどの経済大国となりましたが、私たち日本人は、一部の政策権利者

により起きた戦争に敗れ、戦争の悲惨さをいやと言うほど味わされてきました。

あの310万人余の犠牲者と不幸な歴史があった事を絶対繰り返してはならない、そして忘れてはならないのです。そこで、私が捕虜として味わった辛い体験を次世代に伝え残すため「シベリア捕虜生活」を記させていただきます。

私は昭和18年召集され、19年満州第451部隊に直接入隊、入隊後直ちに初等兵教育開始。あの気温零下30度という満州での厳しい教育を受け、その後、日本の小樽で積雪2m50cmの中での、実弾射撃と突撃訓練、それも束の間、北千島柏原に入港し、幌筵島加熊別に転進、この間、満州到着から約4カ月でした。

実戦では、歩兵部隊では対応不可能な連日の空襲・艦砲射撃を受け、その上平地のため隠れる場所もなく死亡した戦友もいた。この状況は昭和19年4月から20年8月15日の終戦まで続き、終戦後はロシア軍に連れられ北シベリアへ、それから3年間の過酷な捕虜生活が待っていた。

捕虜とは何とも醜いものだった。食事は300gの黒パン、スープ（中には27粒の豆）これが1食。この時から「私は絶対に生きて日本に帰るぞ」と心に誓った。食べられる物は何でも食べた。蛇、蛙、野菜の代わりに木の芽、松の実、白樺の皮を削り出る樹液を飲んだ事もある。汽車が通過した後、客が捨てたパン屑、缶詰の食べかすが落ちていた。我先にと一斉に飛びつき、少し臭いし味も変わっているが、食べても不思議と腹は傷まなかった。

捕虜1年目の作業は、汽車が走るための薪切り、1日の作業が終わり食堂に入ると何人かの死体が並んでいる。今日の作業で原木の下敷きになった戦友たち、無言のまま共に手を合わせる。翌朝、坊さんの経験者が簡単にお経を上げ、作業に出る前に友との別れを惜しむ、その戦友の行く先は不明で教えてもくれない。

捕虜生活2年目、鉄道線路工夫と土方作業、零下35度の寒さでの作業である。そんな辛い作業中、遠くの山々がくっきり浮かぶ、山の向こうが日本の空かもしれない、父母や兄弟姉妹達の顔が一瞬脳裏をかすめる。「会いたい」「帰りたい」と大声で泣いたこともあった。

捕虜生活3年目、ロシアの鉄道官舎の建築にと、のこぎり、カンナ等の鉄物を素手で持つと、零下35度の中では手の皮が鉄部分にくっついてしまう。こんな重労働も、ただ生き甲斐は日本にいつか帰る「タモイ」の一言に尽きる。「タモイ」とはロシア人が良く口にする（良い仕事をする者は早く家に帰れる）の意。その言葉を信じるしかなかった。冬は寒く長い、夏はすぐ終わり、寒さ

もひもじさにも耐えて「タモイ」、帰国の夢を見て死んでいった戦友に今更ながら、その悔しさをしみじみ感じる。

昭和23年10月23日、ロシアのナホトカより京都市舞鶴に生還した。「生きて帰れた」と嬉しくてただただ涙に暮れた。今にして思うと、あの苦しみは夢でなかっただろうか、と錯覚さえ起こす時もある。

しかし、祖国日本のために戦い、終戦後のシベリアでの重労働の中での寒さや栄養失調で死んでいった戦友の霊は、未だあの寒いシベリアの広野をさまよっているのではないだろうか…。寸時も早く遺骨収集される事を望み、心から冥福をお祈りしています。（会報ごてんば2018年11月、2019年1月号より）

「遺族会を引き継いで」私たち・若夫婦・孫へと続く

御殿場市遺族会 杉山しず子

私が物心ついた時から、我が家の奥座敷には若い男の人の写真が並んでいました。戦争で亡くなった父の3人の兄です。

末っ子だった父が家を継ぎました。時々父は「俺はしなすっ子だから～」と亡くなった兄たちがどんなに優秀だったのかを話すのでした。子供心に、確かにその端正な顔立ちに見とれたものです。会ったこともないのに、ずっと前から知っているような気持ちで大人になりました。

結婚し、まず『ひめゆりの塔』へ行きました。主人も一緒に「杉山 昇」の名前を探してくれ、父や従兄弟の分までお参りさせてもらいました。

年を重ね、歳をとった両親の代わりに、何回か靖国神社や護国神社への参拝に行かせてもらうようになりました。遺族会に入っていなければ、参拝するどころか、行くこともなかっただろうと思います。地域の中でも「明日は墓参だね」と当たり前のように行くようになりました。

年の経つのは早いもので、気づけば自分も高齢者の仲間入りをしていました。

娘が結婚し、孫が2人できました。相変わらず、あの写真は並んだままです。

若い両親は、夜、ひとしきり座敷で子供を遊ばせてから「さあ一寝る時間だよ、御先祖様におやすみなさいを言おうね」と、並んだ写真を指差します。上の4歳の孫は「のぼる、あさえ（伯母さん）、こうちゃんと同じこう、ひろし、大じいじ…」等、よくぞ名前まで覚えたものです。そして、おやすみなさいを言って、2階の寝室に行きます。

今、遺族会の高齢化が進み、亡くなったりもして、この遺族会そのものの存続が難しくなっている、という話を聞きますが、この若夫婦も、この孫た

ちも、きっと遺族会を引き継いで、いつまでも供養し、参拝してくれるのではないかと思っています。(会報ごてんば 2019 年 6 月号より)

小学二年の夏 機銃掃射の怖い体験あり

御殿場市遺族会 妹尾輝満

私は昭和 12 年、長崎県生まれの 83 歳で、御殿場に住むようになって 55 年になります。

私の父は昭和 12 年、日中戦争勃発と同時に召集され、老いた母と 19 歳の新妻と生まれたばかりの可愛い坊やを残し、戦地に向かう父親の心中如何ばかりかと察するに余りあるものがあります。そして昭和 14 年、23 歳の若さで中国華北地方の戦場で戦死。途方に暮れる母、茫然自失、戦争の無慈悲さ、語る言葉さえ見当たらないのが母の心境であったろうと思います。

当初は、遺族として周囲からも温かく見守られ援助の手も差し伸べられましたが、戦争が激化するにつれ、私達親子にとって厳しい日々が続きました。母が大事にしていた着物などを風呂敷に包み、近所の農家を回り一握りの米と野菜に交換し、その日を凌ぎ、明日への命をつなぐことで精一杯でした。

昭和 20 年、小学 2 年生の夏休み、母の兄伯父さんが 5 歳の従弟を連れてやってきました。母からお酒を買ってくるように頼まれ、従弟の手を取り買物に出かけた帰り道、突然の空襲警報のサイレンの音、山頂より 2 機の戦闘機、胴体には星のマークがくっきりと、轟音と共に機銃掃射の赤い炎が土煙をあげて目の前を通過その瞬間、操縦士が私に向かって手を振ったように見えました。夢中で近くの民家に飛び込み、そこには老夫婦が居て「声を出さないように」と言いながら、座布団などを何枚も掛けてくれました。右手には伯父さんの大好きなお酒を、左手には従弟を、息を殺して解除を待ったあの光景が、今でもはっきりと思い出されます。その母も、平成 5 年、75 歳で父の元へと旅立ち、御殿場ライオンズクラブ 165 人目の献眼者として一生を閉じました。

私の妻は御殿場市新橋生れで、子供達は一男二女で御小、御中卒であります。御小の校庭の森にそびえ立つ忠霊塔には父の名前も刻まれており、可愛い孫たち 3 人が巣立って行く姿を見守ってくれたことでしょう。

「英霊顕彰」の大切さ、命を捨て必死で戦い守ってくださったこの日本を我々は大事にして、次の世代に引き継いでいくことをお誓い申し上げます。

(会報ごてんば 2021 年 1 月号より)

苦難に立ち向かった親祖先に感謝

御殿場市遺族会 横山俊英

私は昭和16年11月2日生まれ戦中戦後の苦難を味わいました。

生まれた年の昭和16年12月8日には真珠湾攻撃があり大東亜戦争に突入しました。まさに戦中に生まれたのです。私が生まれたのは小山町藤曲、自宅は富士紡績の近くでした。富士紡績は駿河小山駅隣にあり軍需品としての布地を作っていたのでアメリカ軍の標的にされたと聞いています。

ある時(昭和20年7月30日 私3歳8ヶ月)朝方、空襲警報が発令されました。

近所の防空壕に逃げる時間がありません。防空頭巾を被り、座敷の柱を背にして布団を被る父のあぐらの中に飛び込み、父は私を抱く様にかばい戦闘機の去るのを待ちました。富士紡績が空襲を受け多数の社員が亡くなった事を後から知りました。我が家でも爆弾の破片が飛んで来て玄関のガラスを割り、台所の屋根と床にも破片で穴が開いていました。空襲が終わった後、屋外に落ちていた機銃の薬きょうを近所の伯父さんと拾い側溝に捨てたのを覚えています。これは危険だと我が家でも庭に防空壕を掘り始めました。しかし、深さ十センチほど掘った所で作業が幾日も進まなくなりました。何故か？戦争が終わったからでした。昭和20年8月15日です。

戦争中から続く更なる食糧難が始まります。米、さつま芋、大豆の粉、コーリャン、砂糖、魚、マッチなど配給です。配給には無いカボチャのつる、ぎぼうの葉の混ぜ御飯、カエル、雀、なども食べました。在郷軍人だった父は結核に罹患し、戦争が終わった1年後の昭和21年9月24日自宅で病死しました。私4歳10ヶ月です。父を失った我が家では父が建てた自宅を売り払い、実家の御殿場市中清水に移り住みました。実家では農業を少しやっていたので何とか米にありつけたのです。家が売れなかったら一家心中をしていたと、母はよく言っていました。

私の家では、昭和11年3月に父の弟が千葉県館山航空隊で戦闘機の操縦訓練中に僚機と接触、3,000m上空から墜落死(27)、昭和18年3月にはやはり父の弟がニューギニア方面海上でアメリカ軍の攻撃を受け駆逐艦朝潮と共に沈没死(29)しております。

ニューギニア叔父の戦死4カ月後に生まれた一粒種の息子は、母親の離婚によって孤児となり、実家の祖父に引き取られました。そして引越し合流した私達兄弟の弟として一緒に生活することとなりました。家族合わせて7人、この

時期の祖父と私の母の食糧確保のための農作業の困難さを思う時、ただただ感謝するばかりです。

私は戦死者が眠る我が家のお墓、地区の殉国碑、静岡県護國神社、靖國神社、無名戦士の千鳥ヶ淵戦没者墓苑、沖縄静岡の塔に参列しお墓参りの究極を体験しています。75年前の戦争を元とし平和を末（すえ）とするなら「元を忘れず末を乱さず」この教えを多くの人に語りかけ「英霊顕彰」（我が国を守るために尊い生命を捧げた人に感謝すること及びこのことを次代に継承してゆくこと）の大切さを継承して参ります。